

式
辞

寒かった冬も終わりを告げ、桜のたよりの聞こえる竜王山から見渡せば、周防灘も春の光を受けてきらめき、日差しの心地よさに新しい季節の到来を感じる頃となりました。

本日、山口東京理科大学工学部並びに大学院工学研究科の課程を修了された皆さん、おめでとうございます。そして、皆さんを支えてこられ、今日の良き日とともにお迎えになられているご家族の皆様にも、お祝い申し上げます。

また、本日、ご多忙の中、ご臨席を賜りました、ご来賓の皆様にも、心より御礼申し上げます。

入学してから卒業までの歳月は、短くもあり、長くもあり、両方の思いを、皆さんは持っていると思います。どちらにしても、大学生活の間に皆さんは大きく変わりました。皆さんを目のあたりにしてきた私自身、皆さんの物事を観る視野の広がり、知識や知恵のふくらみを強く感じます。本学の学生の伝統である気質、人に対するやさしさと物事に対するひたむきさに加えて、たくましが備わってきたことを頼もしく感じます。こうした成長は、皆さんの真摯に学ぶ日々の姿勢や人とのつながりを通して、もたらされたものだと思います。本学が、皆さんの成長に少しでも貢献できたならば、これ以上の喜びはありません。

そして、大学や社会を取り巻く環境も、皆さんが入学した頃とは大きく変わってきています。今日、皆さんを卒業生として社会に送り出すに際し、今の時代の状況の難しさを思わざるを得ません。

日本経済が希望ある未来に向かって進むための成功の鍵は、原動力たる科学技術の力であり、変革期に即応できる人材にあると言っても過言ではありません。

ません。社会に巣立つ皆さんに対する産業界の期待も、益々、高まっています。学んだ工学や科学技術の知識を力に、あらゆる困難に堂々と対峙して、それぞれの目標に向かってまい進してほしいと思います。

さて、本日の学位記授与式に当たり、学部や大学院での日々を共にした教員として、社会の先輩として、学び舎を後にする若者に伝えたいことをふたつ述べさせていただきます。

ひとつは、「学んだ工学や科学技術に自信をもって生きてください」ということです。

この三月十一日は、東日本が大震災に見舞われ、多くの尊い命が失われてから七年目の日でした。私もまた、北関東の仕事場で被害を受け、直後に本学に赴任いたしました。早々に、その年の卒業生の皆さんに、企業人の先輩としてお話しさせて頂きましたが、生々しい事実を語りながら、学んだ工学に自信をもって、たくましく生きていってくださいとしか言えませんでした。津波による災害と原子力発電所の事故は人々の生活に大きな影を落とし、現在でも七万人以上という山陽小野田市の人口よりも多い方たちが避難生活を余儀なくされております。こうした中、津波にも人々の心までは流されず、支えあい、励ましあって復興の努力を続けておりますことは日本人としての誇りです。

皆さんが在学した年月にも、世界や日本の国土が、多くの天災、人災に見舞われました。どんなに科学技術を尽くしても、人知で制御できない現実花落胆することが多くありました。そのような中、将来は災害を未然に防ぎ、

あるいは最小限の被害に抑えられるように、工学の知識や科学技術を修学することこそが、今、私たちにできる最善の対応であるとして学び続けた、皆さんの真摯な姿勢は断じて揺るがないものであったことを誇りに思っています。

震災の直後から、多くの文化人や科学技術を職業とする人達までもが、科学技術の無力を語り、もはや、科学技術は信じられないと、その否定まで言われました。残念なことに、七年を経た今でも、そうした風潮は変わりません。

確かに科学技術や工学は万能ではなく、その使い方や限界を見誤ると、戦争や人類の破滅にもつながりかねません。私たち教員は、いつも人間としての教養や感性を磨くことの重要性を語り続けてきました。専門知識だけを身につければよいというものではありません。如何に科学知識や研究の成果を正しく用いるかの判断能力や倫理性こそが、今こそ大事なのです。

皆さんは、理工学の知識を学んだものとして、それをよりどころとして、これから社会で生きていかなければならないのです。地震を予知し、津波に備え、原子力の課題を明らかにして、いつの日か問題を克服して解決を図るのは我々、工学や理学に携わる者、研究者や技術者の使命に他なりません。科学技術に裏付けられた正論こそ私たちの行動指針なのです。社会に出て、ぜひ、それぞれの学科や研究科で学んだことに自信をもち、正しい道を求め続けてください。時には周りに受け入れられないこともあるかもしれませんが、正しいと信じる道を貫いてください。誠意を尽くせば、必ず思いは通じるものです。

私が今日、申し上げたい、もうひとつは、「生涯、学び続けてください」ということです。

人類が悠久の時を経て、今、豊かな文明を享受できているのは、たゆまぬ知識の蓄積があればこそです。進化の最前線にいる私たちこそ、新しい知識を学び、蓄え続けなければならないのです。それをやめたときが人類文明の終焉です。皆さんは最高学府まで学び続け、ひとつの節目を迎えましたが、学びに卒業はないのです。人は一生、学ぶべき使命をおっているのです。学ぶとは、大学や大学院で学ぶ専門知識や技術だけではありません。あらゆるものごとを対象とします。

私は、半世紀近く前に大学を卒業させていただきました。優秀でもなければ勤勉な学生でもなく、大学卒とは名ばかりで、仕事に就いた途端、何もわからず途方に暮れたことを思い出すと、今でも、冷や汗が出ます。多くの方々から仕事や様々な活動を通じて学び、追い詰められた気持ちで、知識や技術の習得に励みました。昼間聞いたことが分からないのが悔しくて、仕事の帰りに専門書を買って求め、徹夜して読んだことも数えきれないほどありました。必要に迫られて必死で身に着けたものこそが本物の知識です。

世の中にはいろいろな事情により大学で学ぶことのできない人たちがたくさんいます。七十数億人の人類からすれば、大学で学ぶ、恵まれた人はほんの少数です。したがって、知識を身に着け自分を高めるところを大学と言うのでしたら、多くの人にとっての大学とは自分のいる場所であり、組織であり、会社であり、家庭であり、社会そのものなのです。学歴としての大学や

大学院卒で人を判断してはなりません。どんなに知名度の高い大学を出た人でも学ぶ姿勢を忘れた人は失格です。学歴がなくとも社会という大学で研鑽をつまれた、立派な方が身の回りにも大勢いらっしやいます。ぜひ、これからは、周りの方々を師と思い、あらゆる場で、あらゆることから、あらゆる人から、学び続けてください。そして、ひとりひとりが属する社会の組織をこれからは大学と思い、いつか、そこを卒業するつもりで励んでください。

本学では、今年度より市民の皆様と一緒に教室で学んでいただく、開放講座を設けました。五人の方々が最初の修了生となってくださいました。皆様、お教えする教員よりもご年配の方々に、私の講義に参加してください。の方も七十歳の市内在住の方でした。一日も休まず、学生達のグループ演習にも熱心に参加してくださいました。そして、最後に感想としてお聞きした言葉が「楽しかったです」でした。皆さん、素晴らしいことだと思いませんか。私自身、社会に出てからも必要に迫られ、あるいは興味から学んできましたが、「学ぶことが楽しい」という境地にはいまだ達しておりません。いつか自分も、この方のように学ぶことが楽しいといえるような人になりたいと思います。どうか皆さんも、長い人生においてこの崇高な境地を目指してください。

さて、本日は、人生、ひとつ目の大学の卒業です。

されど、このひとつ目の大学こそ、多感な心の成長の時期を過ごした、忘れがたき場所なのです。これからいろいろあるでしょう。苦しいとき、つらいときには理科大での学びの日々や、かけがえのない友人のことを思い出して勇気を奮い立たせてください。素晴らしいことに巡り合えた時に

は、私たちを思い出して、少しだけ、そのおすそ分けを運んできてください。いつでも私たちは皆さんを待っています。理科大は皆さんのかけがえのない母校なのですから。

さて、その母校ですが、皆さんの在学したこの四年間は、大きな転換の時期でした。今年の学部卒業生の多くが入学した平成二十六年の十二月に、学校法人東京理科大学と山陽小野田市が公立大学法人化に合意、平成二十七年八月に公立大学法人設立の申請を行い、同年十二月に公立化の認可を頂き、平成二十八年四月に公立大学に移行いたしました。さらに、平成二十九年三月には薬学部設置の申請を行い、同年八月に認可を頂きました。この四月から薬学部がスタートし、工学と薬学よりなる大学へと発展してまいります。これらの過程においては、この大学の存続と発展を願う多くの方々の方々の献身的なご支援、ご努力があったことを私たちは決して忘れることはないでしょう。

そして、設立母体が変わるといふ大きな変化の中でも、本学の教育姿勢は、みじんも揺らがず、真摯に皆さんの勉学意欲に応えました。学ぶ皆さんも、よく修学してくれました。キャンパスに槌音が響き渡り、空を見上げると、天を突き刺すようなクレーンが何基も並び、心穏やかならぬ時をすごしたこともあったかもしれませんが、皆さんは、環境の変化をもともせず、たくましく、学んでくれたことを誇りに思います。

いつまでもこの風さわやかな大学を忘れないでください。この懐かしき場所を忘れないでください。きららビーチの心洗われる夕日、龍王山から見た山陽小野田の穏やかな街並みを忘れないでください。暖かく、皆さんを見守

り、育ててくださった地元の方々を忘れないでください。旅の果てにこの地に毎年戻ってきてくれる愛おしい蝶、アサギマダラのように、いつとき遠く離れて行く人も、やがて、この地に戻ってこられる日を心待ちにしております。

この山陽小野田の街は、競技かるたの盛んなところでもあります。その百人一首には入っておりませんが、百人一首の歌人でもある私の好きな紀貫之の歌があります。「あまたにはぬいかさねねど、からごろも、おもうこころはちえにぞありける」、門出にあたり、あなたにおくる、このころもは、いくえにもぬいかさねたりっぱなものではないけれど、あなたを思う心は幾重にもかさなつてつきることはありません、という意味です。本日、ここにお渡しいたしました、学位記は、物理的には単なる一枚の紙に過ぎないでしょう。しかし、ここに込められた、皆様やご家族の思い、そして私たちの思いは計り知れないものがあるということでもあります。「あまたにはぬいかさねねど、からごろも、おもうこころはちえにぞありける」大変、おなごり惜しいですが、このはなむけの歌とともに、皆様のこれからの、ご活躍をお祈りして、式辞を終えることといたします。

平成三十年三月二十一日

山陽小野田市立山口東京理科大学長 森 田 廣